

9月第4週の礼拝説教

■日 時：2022年9月25日（日）10：30—11：30 聖霊降臨節 第17主日

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「神の霊によって」

■聖 書：ローマの信徒への手紙8章14—15節（新約p284）

■讃美歌：455「神は私の強い味方。」518「主にありてぞ われは生くる、」

本日の聖書箇所をご覧になって、あるいは先ほど司式者によって読んでいただいた御言葉を聞いて、この箇所は今年になって説教で聞いたことがある、と思われた方もおられるかもしれません。その通りです。今年の6月12日の主日礼拝の中で、ローマの信徒への手紙8章12節から17節を取り上げ、「神の子とする霊」という題で説教しています。その時は、その前の週の6月5日がペンテコステであったので、15節の「**あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。**」という御言葉から、神の霊が私たちの内に宿って下さるといふ恵みを中心にお話ししたと思います。しかし本日は、9月4日の主日礼拝から始めている使徒信条の内容と関連のある御言葉をご一緒に考えてみるという観点からお話ししようと思います。では、本日の聖書箇所は使徒信条の文言のどの部分と関連するののかと言えば、冒頭の「**我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。**」の最後の「**父なる神**」というところです。「**我は・・・信ず。**」から始まる信仰告白の中で、これまでに「**天地の造り主である神様**」とはどのようなお方であるのか、「**全能の神様**」とはどのようなお方であるのかを考えてきました。そして、本日は「**父なる神様**」とはどのようなお方であるのかを考えてみたいと思います。

ところで最近、日本の現職の大臣が、今大きな社会問題になっている団体の過去の集会の中で「真（まこと）のお父様のメッセージをお聴きした時、言葉を超えた真実を感じた」という発言をしたことが話題になっています。この団体では、すでに亡くなった前の教祖を「真のお父様」と呼び、その後継者である夫人を「真のお母様」と呼んで崇めているということです。しかし、この「真のお父様」は、本日の聖書箇所であるローマの信徒への手紙8章15節の御言葉によるならば「**人を奴隷として再び恐れに陥れる霊**」を多くの人々に振りかけたようです。その霊によって捕らわれてしまった人々は、怖れによって支配されている狭い闇の中らかなか外の社会に出てくるのが困難になっているということが深刻な問題である、と報じられていました。カルトと呼ばれる新興宗教の持つ一面であることを知っておきたいと思います。

では、私たちの信じているキリスト教で語られている神の霊とはどのようなものなのか、それが本日の箇所ではっきりと述べられています。それは「人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊」であると言うのです。神の霊は、様々な恐れの中に閉じ込められている者を解放して自由な神の子とするのです。それは使徒パウロ自身がかつて体験したことでした。主イエスと出会う以前のパウロは、律法を誰よりもきちんと守っているという自信のもとに、自分が正しく立派な者であるという誇りを持って生きていました。しかし、そのような歩みにはいつも恐れがつきまとっており、それゆえに教会を迫害していたとも言えます。けれどもパウロは、天からの光に打たれて主イエスと出会う経験をするのです。そして、彼は生きる方向を大きく変えられます。そのことは、主イエス・キリストを信じる信仰を与えられ、主イエスと共に神の子とされ、神が自分を無条件で愛して下さっていることを知らされた経験でした。その愛の中で、神を信頼して「アッバ、父よ」と呼んで生きる者とされたのです。だからこそ、確信を持って、15節にあるように「あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、「アッバ、父よ」と呼ぶのです。」と他の人々にも呼びかけているのです。

「アッバ」というのは、幼い子供が父親を親しく呼ぶ言葉です。旧約聖書はヘブル語で書かれているのですが、そのヘブル語で「父」を表す言葉が「アブ」ですから、その言葉が子供の言葉として少し砕けた言い方になったのかもしれませんが。日本語で言えば「お父ちゃん」、今ならば、「パパ、パパ」と幼児がまだ片言で呼びかけているというような言葉です。実は、私は「父」という存在を身近に感じたことはありません。それは、私の生まれる2か月ぐらい前に父が病死してしまったからです。ですから、本当の意味での「アッバ」という言葉の実感がないのです。しかし、祖父母に1歳にもならないときに引き取られた私は、祖父母の溺愛の中でわがままに育ちましたから、私にとっての「アッバ」は祖父ということになります。そのように考えてくると、神様に向かって「お父ちゃん」と呼びかけて祈るなどということは、当時のユダヤ人たちには考えられない驚くべきことでした。しかし、主イエスは十字架にお架かりになる直前のゲッセマネの祈りの中で「アッバ、父よ」と呼びかけて真剣に祈っておられたので、その祈りを聞いていた弟子たちが非常に驚いて、それで「アッバ」という言葉がそのまま聖書に残されたと考えられています。それは主イエスが神の「独り子」であられ、神様との間に父と子としての深い信頼関係があったということです。主イエスは、神に向かって「アッバ」と呼びかけることができる唯一人の神の子だったのです。けれども、「神の子とする霊」を受けることによって、私たちも主イエスと同じように神に向かって「アッバ、父よ」と呼びかけることが出

来る者となる、つまり神の霊によって私達も主イエスと同じ神の子とされ、神様に向かって親しく「天のお父様」と語りかけることが出来るようになる、それがキリスト教で語っている救いなのです。

神の霊が私達の内に宿って下さり与えて下さる恵みを、14節では「**神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。**」とあらかじめ語っています。そして本日は読みませんでした、パウロはさらに16節で「**この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、わたしたちの霊と一緒に証ししてくださいます**」と語っています。神の霊は私達を神の子として下さるだけではなくて、そのことを証しして下さるのです。証しするとは、証言する、証明する、ということです。私達が本当に神の子とされているのだということを、神の霊が証言して下さり、そのことの証人となって下さるのです。これはとても大きな恵みです。私達は、自分が神の子とされていることを自分で確認したり確信したりすることは出来ません。しかし私達の内に宿って下さっている神の霊が、あなたは神の子である、と証しして下さるのです。つまり神ご自身が私達にそのように宣言して下さるのです。私達は、その神の宣言を毎週の礼拝において御言葉によって与えられています。それはまた、神様を「アッパ」と幼子のように親しく呼びかける祈りの言葉が与えられることでもあります。そのようにして、祈りに導かれ、今週1週間も歩んでまいりましょう。